

【本文】

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が
方人をなして智者を失はん時は、師子
王の如くなる心をもてる者必ず仏にな
るべし。例せば日蓮が如し。これおこ
れるにはあらず、正法を惜しむ心の強
盛なるべし。おこる者は必ず強敵に値
ひておそるゝ心出来するなり。例せば
修羅のおごり、帝釈にせめられて、無
熱池の蓮の中に小身と成りて隠れしが
如し。正法は一字一句なれども時機に
叶ひぬれば必ず得道なるべし。千経万
論を習学すれども時機に相違すれば叶
ふべからず。

【背景と大意】

本抄は、文永九（一二七二）年三月二十日、日蓮大聖人御年五十一歳の時に佐渡・塚原にて認められた書です。端書に「日蓮弟子檀那等御中」とあることから、広く門下一同に与えられた御消息と拝せられます。

強大な権力を持つ幕府役人と謗法の悪僧らが結託し、大聖人を抹殺しようとした竜口法難、それに続く佐渡配流。これらの大法難を目の当たりにした弟子・信徒の中には、大聖人の教えに疑いを起こし退転する者が出ました。そこで大聖人は、本抄の前月に述作された『開目抄』で、法華経に説かれる諸難を身読した自身こそ真の法華経の行者であり、末法に出現した三徳有縁の仏であることを明かし、南無妙法蓮華経こそが唯一の正法であることを示されました。

これに続く本抄では、仏法の上から障魔が競う意義を明かし、勇猛果敢に正法を弘める者が必ず成仏することを示して、門下一同の信行を励まされています。

【通釈】

悪王が正法を破ろうとし、邪法の僧等がそれに味方して智者を滅ぼそうとする時は、師子王のような心を持つ者が必ず仏になるのである。たとえば日蓮のとおりである。これは驕つて言うのではなく、正法を惜しむ心が強盛なるがゆえである。驕れる者は強敵に遭うと恐怖心を生じる。たとえば驕った阿修羅が帝釈天に攻められて、無熱池の蓮の中に小さくなって隠れたようなものである。正法は一字一句でも、時機に適えば必ず成仏する。千経万論を習学しても、時機に相違すれば成仏は叶わないのである。

【主な語句の解説】

方人：ひいきすること。味方。
師子王：百獣の王ライオンのこと。大聖人は法華経や仏の勝劣を示す譬えとして用いられる。また仏の説法を師子の吼える声にたとえて「師子吼」とも称する。
法華経従地涌出品第十五には「諸仏の師子奮迅の力」（法華経四一八）とある。
修羅のおごり：隠れしが如し：『観仏三昧海経』（大正蔵一五一六四七）に説かれる。帝釈天に戦いを挑んだ阿修羅王が反撃に遭い、蓮の穴に逃げ込んだという説話。
無熱池：炎熱の苦しみが無い池。仏教で説く南閻浮提（人間世界）の中心にあり、四大河の水源とされる。阿耨池・無熱惱池、清涼池ともいう。

○師子王の如き心で実践

大聖人は、拝読の御文に「師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」と仰せられています。「師子王の心」とは、勇猛精進の心であると拝せられます。

大聖人様は、『聖人御難事』に「各々師子王の心を取り出だして、いかに人をどすともをづる事なかれ。師子王は百獸にをぢず、師子の子又かくのごとし」（御書一三九七）と示され、折伏実践によって様々な法難が起り、邪宗の者達から脅されるようなことがあっても、決してたじろかず、堂々と折伏をやり通すべきであると指南されているのです。

私達が不惜身命の精神で折伏に励むならば、本抄後段に「先業の重罪を今生に消して、後生の三悪を脱れん」（同五八〇）と示されるように、過去からの謗法罪障を軽い果報として受け、今世のうちに罪障を消滅する転重軽受の功德によつて、必ず成仏を果たしていけるのです。総本山第六十六世日達上人は、本抄を講ぜられた折に「正法のために折伏して行くことこそ真実に強い者であります」（達全二一一―五五四）と指南されています。私達はこの御指南のままに、何ものをも恐れぬ勇氣を持つて、正法流布のため折伏を実践してまいりましょう。

○謗法破折は慈悲の振る舞い

大聖人御在世当時、弟子等の中には「日蓮御房は師匠にてはおはせども余りにこはし。我等はやはらかに法華経を弘むべし」（佐渡御書・御書五八三）と、大聖人の謗法破折を批判する者が現れました。しかし、これらの者に対して大聖人は「螢火が日月を笑うようなものだ」（同右趣意）と断ぜられています。そもそも謗法を破折することは、「一子の重病を灸（やい）とせざるべしや」（開目抄・同五七七）とあるように、親が子を思う心と同じく、相手を何としても救つてあげたいとの一念から起る慈悲の振る舞いです。私達は弟子檀那として、大聖人が大慈悲心から行われた破邪顕正の折伏こそ、自他共に成仏できる最高の仏道修行であると銘記し、日々精励することが大切です。

○日如上人御指南

折伏は相手が納得しなければ入信しません。相手を納得せしめるものは、私達の人格であり、私達の慈悲心であり、決意であります（中略）自分自身がしっかりと題目を唱えていくなかに、おのずと信心と人格が磨かれ、慈悲の心をもって決然として折伏を行じていく勇氣と智慧と行動力が生まれてくるのであります。（大日蓮・令和五年八月号）

私達はまず自らが真剣な唱題に徹し、御本尊から智慧と勇氣を頂いて、動くこと、行動することが大事なのです。

この積み重ねによつて、自身の折伏も支部の誓願も必ず成就することができます。本年も残り二カ月余りとなりました。僧俗一致、講中異体同心の団結をもつて、折伏実践を最優先し、共々精進してまいろうではありませんか。